古代ゲルマン語の Medium 表現の残照と変遷

手　嶋　竹　司

印欧語のなかに数えられる諸語派，諸語族のなかでゲルマン語に共通するとりわけ大きな特徴の一つに動詞の組織体系上の特性が挙げられる。それは動詞の構成上の形態からくる活用形式に基く分類にあることはよく知られている。例えば強変化動詞と弱変化動詞と呼ばれているのがそれである。強変化動詞の構造的特性は印欧語から受け継がれた Ablaut（母音交替）という幹母音の母音度の交替でもって動詞の文法カテゴリーの一部を表わす構造をもっている。これに対して弱変化動詞はその起源が比較的新しく，ゲルマン語が独自に個有の組織として編み出したものである。

その基本的な背景は印欧語に内在はしていたものの，それをゲルマン語が新たに組み替えて案出したものである。その構成法には四つのタイプがあった。その派生法の一つの手続きとして今ここにみる -ja- 幹動詞と呼ばれるものがある。その構成法は語根部と屈折語尾の間に一つの派生を特徴づける Formans（構成素）として -ja- を挿入するもので，この -ja- 幹動詞[1] は他の派生法に比べて，その占める比重は時とともに増大していくが，特にこの Formans は幹母音の音韻に影響することが大きく，且つ強靱であって，今日までその作用力を失っていない。その意味機能は faktitiv（使役的）kausativ（作為的）及び inchoativ（起始始動的）な意味作用を負荷させる働きをもっている。ところがこの -ja- 幹をもつもののなかに弱変化動詞の区分から漏れるものがいくつかある。それというのは古代ゲルマン語の動詞のなかに強変化動詞でありながら，語幹形成の上で強変化動詞としての Ablaut のほかに，この -ja- を兼ね備えているものがある。ここでは，これらの例外的な現象についていろいろな角度から検討を加えてみようと思う。

強変化動詞としての特性に加えて，さらに例外的に一見弱変化的ともみられる Formans を併わせもっているということにも，それなりの raison d'être があるのではなかろうか。時にそのような特異な言語現象には解明の手掛りとなるものがそれぞれの言語の歴史のなかに発見されることがある。

前置きはこのくらいにして本題に入るならば，筆者はこの特異な事実に対して兼ねてからその出所来歴の究明に関心をよせてきた。

まずここにみる一連の強変化動詞は Formans -ja- を具有してはいるものものの，その派生関係の成立はまず考えられない。さらに一般の弱変化動詞の場合と異って構成素 -ja- が現在形にのみ姿を見せ，その他の時形にはその痕跡を残さずに消えていく，このような強変化の動詞の数は極く限られている。

	An.	Ae.	Ahd.	As.
*sitjan (sitzen)	sitja	sittan	sizzen	sittian

*ligjan (liegen)	liggja	licgan	liggen	liggian
*biðjan (bitten)	biðja	biddan	bitten	biddian

上掲の表からもわかるように古代ノルド語（Altnordisch）や古代サクソン語（Altsächsisch）では語幹形成素の -ja- が認められるけれども，古英語や古高ドイツ語（Althochdeutsch）では子音重複すなわち重子音（Gemination）にその投影を残している。この表にゴート語（Gotisch）の例が挙げられていないのは，ゴート語の場合には *sitan, ligan* となっていて，上に述べたような特性が認められないが，これはゴート語ではほかのゲルマン語に比べると Systemzwang（体系からくる強制）の拘束が強力に働く言語であって，その作用の結果，体系の平均化を受け，構造上の整合性が強く強変化動詞一般に同化吸収されたためだと考えられる。

ではこの動詞語幹形成素はもともとどのような意味機能をもっていたかという点について考えてみるに，まずその説明に入る前に考察のための手掛りとして例文からその事情を探ってみよう。

*sitjan

Hel.

5976

sitit imo thar an thea swiðron half godes

（〔キリスト〕は神の右側に座を占む）

5805 f.

endi im uppan them hlêwe gisat diurlîc
drohtines bodo

（その墓の上に誉れ高き神の御使いの者が座す）

1176

(Iacobus endi Iohannes)
satun im tha gesunfader an ênumu sande uppen

（父と息子〔ヤコブとヨハネ〕たちが砂の上に腰をおろしていた）

Alts. Genesis. 260

thanna sat im thar an innan aðalburdig man

（だがしかしそのなかに高貴の生まれの方が座った）

Der Wanderer 111

swa cwæð snottor on mode, gesæt him sundor æt rune.

（その賢者は胸の中でそう語り，ひとりもの思いに沈んだ）

Tat. 152, 3

gisizzet iu garo rîhhi fon anaginne weralti

（天地創造以来そこに用意されてある国を手中に収めよ）

Caedmon. 1906 f.

nû þû, Lôth, geþenc,

"þæt unc môdige ymb mearce sittað,
(さあ汝 Loth よ，勇気ある我々はこの国境に止まることに思いをいたせ)

*liggjan

Hel. 3336 f.

(Lazarus) lag imu dago gehwilikes
at them durrun foren
(Lazarus は来る日も来る日も連日外の戸口の前に横になっていた)

*biðjan

Hel. 852

he im sô githiudo bêd torhtaro têcno
(彼は身にふさわしい謙虚な心で輝ける大空からの兆を待ち望んだ)

Caedmon. 2024 ff.

þâ þæt inwitspell Abraham sægde
freondum sînum; bæd him fultumes
wærfæst hæleð willgeðoftan
(そのとき Abraham はこの不幸な知らせを自分の仲間の者に伝えた。
忠実な友は従順な仲間に助けを求めた)

Bosworth and Toller: An Anglo-Saxon Dictionary. S. 99. biddan.

hŷ him tô êow ârna bǣdun
(彼らは汝らの慈悲の心にすがり訴えた)

libbian (leben)

Hol. 4034 f.

ac he imu mahti libbien forð
ferahes gefullid.
(しかし彼がこれから先生命力にあふれて生き続けんことを)

Bosworth and Toller: An Anglo-Saxon Dictionary. S. 636. libban.

wê lybba mislice on twelf mônþum; nû sceole we lybban Gode,
wê ðe ôðrum tîman ûs sylfum leofodon
(我々はほかの時〔これまで〕ひとえにわがために生きて来た。
これからの12ケ月はこれまでと異なった生き方をする。今や神
に仕える生活がはじまる)

hebbian (haben)

Alts. Genesis. 120

habdun im hugi strangan
(彼らは強い意志を持っていた)

Hel. 832 ff.

gewitun im tho eft thanan
fon Hierusalem Ioseph endi Maria,
habdun *im* te gisîðea sunu druhtines
(ヨゼフとマリアはそこイエルサレムを再び去った。そして家族
の一員として神の子を持った)

intransitive Verba der Ruhe

Caedmon. 433 f.

siððan ic me sefte mæg

restan on þyssum racentum, gif him þæt rice losað.

(もしその国が滅滅しても，私はこの鎖につながれて安らかに休むことができる)

Hel. 3758

stôd imu thô fora themu wîhe waldandeo Crist

(そのとき主キリストが聖なる所にお立ちになった)

Hel. 332

was im willeo mikil,

that he sia sô hêlaglîco haldan môsti:

(彼がそれを〔神の掟〕を神聖なものにしておこうという彼の意志は強固であった)

Hildebrandslied 39

du bist dir, altêr Hûn, ummêt spâhêr

(汝老いたるフーン人よ，汝は人並はずれて賢いお方じゃ)

Tat. 41, 1

wartêt iu fon luggen wizagon,

(汝ら偽りの予言者を恐れるなかれ)

Otfrid IV. 27, 30 f.

thaz ih screib, thaz steit imo giscriban thâr

(私が述べ認めるところのことはそこにしかと書き記されている)

intransitive Verba der Bewegung

Hel. 424

giwitun im te Bethleem thanan

(彼らはそこからベスレームへと立ち向かった)

Caedmon. 1779

him þâ fêran gewât fæder ælmihtiges

(それから全能の父なる方はおたち〔出発〕になられた)

Beowulf 26 f.

him ðâ Scyld gewât tô gescæp-hwîle,

fela-hrôr, fêran on frêan wæ̂re.

(それから Scyld は運命の時へと向かった，勇を鼓して悠然と神の庇護のうちへと向かって行った)

Her. 102

endi geng im the gihêrodo man

an thana wîh innan,

(その秀れて気高き方〔Zacharias〕は聖なるところに入っていかれた)

Hel. 1235 f.

quamun im tharod be them lêron Cristes,

(彼らはキリストの教えを授かるためにそちらへやって来た)

Caedmon 255

Þæ him com from weroda drihtne,
(そのことは民草の主から出たものである)

Hel. 2677 f.

thô he imu mid them liudiun samad frôlîco fôr
(その方〔神の子〕は人々とともに喜ばしき心もて同道された)

Caedmon. 542 f.

Þŷ ic Þê hyran ne cann,
ac Þû meaht Þê forð faran.
(だから私は汝の言うことに耳を傾けることはできないが，しかし汝は勝手に行くがよい)

Caedmon. 240

hwærf him Þâ tô heofenum hâlig drihten,
(そのとき聖なる主は身を天空にお向けになられた)

Hel. 5339 f.

thuo hwarf im eft thie heritogo an that hûs innan te thero thingstedi,
(その領主〔Pilatus〕はその建物の中，裁きの庭にもどって行った)

Verba der Gemütsbewegung

Beowulf. 2347

nô hê him Þâ sæcce ondrêd,
(彼は争いを恐れることはなかった)

Caedmon. 2168

ne Þearft Þû Þê wiht ondrǣdan,
(汝は少しも恐がる必要はない)

Hel. 116

hêt that he im ni andrêdi:
(〔その心やさしき老人に〕恐がることはないとおいいつけになった)

Otfrid. V. 4, 29

forahtun in thô gâhun, thie thes grabes sâhun
(その墓の方に目をやった人々は俄かに恐ろしくなった)

Tat. 210, 1

forhtun in thrâto
(彼らは大きな恐怖心にとりつかれた)

Got. Wulfila. Mt. 10, 28

ni ogeiÞ izwis Þans usqimandans
(汝ら人の身をなきものにする者を恐れるなかれ)

Wulfila. Mc. 16, 6

ni faurhteiÞ izwis,
(汝ら恐がるなかれ)

上に提示した古代ゲルマン語の文献資料からの例文に読みとれるように，上に挙げた

*sitjan, *ligjan 及び *bidjan には人称代名詞の Dativ 形が共起しているという表現形式をとって用いられていることが知られる。さらにここで *bidjan の場合を考えてみるに，この動詞のもつ基本的な意味は「要求」「期待」といった動詞概念からみてその相手となる人は常に対格（Akkusativ）におかれ，なお「要求」の目的である対象物は属格（Genitiv）に立つのがゲルマン語に共通する統語上の支配関係である。こうしたことからみても，ここに *bidjan と共起する人称代名詞が Dativ におかれていることには意味があるものと考えてよいかと思う。さらに加えて，*sitjan とか *ligjan が共に自動詞であるという事実をも考慮に入れて考えるとき，ここに用いられている Dativ は再帰的な働きをもっているものとみなしてよいかと思う。古代ゲルマン語では三人称を除いては人称代名詞の３・４格形がそのまま再帰代名詞として用いられていることを付け加えておく。

以上のことを併わせて考えるとき，Dativ の再帰代名詞と -ja- 幹動詞とが共起する表現形式にはなにか特殊な意味機能が含まれていたとみてよいかと思う，そのほか資料からもわかるように *libbian*, (leben,) や *hebbian* (haben) さらに *frawaúkjan* についても同様に Dativ の再帰代名詞が付せられていることを知る。

Nachträge

Wulfila. Lk. 15, 18

frawaurhta mis in himin jah in andwairþja þeinamma

（私は天に対して，またあなたの御前にて罪を犯した）

Hel. 3394 f.

ik an forhtun bium

that sie im thar farwirkien

（私は彼らが罪を犯すのではないかと心配している）

Alts. Genesis. 52 ff.

ni mag im ênig mann than swiðor

wero farwirkien an werldrikea

（この世では人は誰も〔汝ほどの〕大きい罪を犯すものはいないであろう）

このような特異な表現形式には統語上の必要要件の枠外にある余剰的，冗語的（pleorastisch）な意味合いがこめられていたとみることができる。一般にこのような Dativ 形には dativus ethicus（関心の与格），dativus commodi（利害，便宜の与格）とか dativus sympathicus（共感の与格）という見地からの考察がなされてきたかと思う，しかし今ここにはそのような観点からは律しきれないものが含まれているように思われる。

さて，ここで問題を動詞の態（Diathesis, Genus Verbi）に焦点を当てて考えてみよう。印欧語では動詞の態は Aktivum（能動態）と Medium（中間態）の二つの態があったが，後に Passivum が現われ Medium はその中に吸収されていった。Medium はその名の示す如く，Aktivum と Passivum の中間に位置する態で，動詞の表わす動作，行為が主語から出て主語に帰る行為を表わすとする限りでは今日の再帰構文と殆ど距るところがない。ただし，本来の Medium の細部においては現代語の再帰表現と乖離するところがいくつかある。ここでは J. Wackernagel (1950. I. 124 ff) が詳しく説明しているのでここに要約して紹介しておこう[2)]。彼はこの Medium の用法を次のように五つの意味機能に分類している。

1) 主語の関心と主語自身の領域に関する行為を表わすもの。
2) 行為を通して主語が行為の結果の保持者となる行為を表わす場合。
3) 能動態が主語の所有物を相手に譲渡することを表わすのに対して，中間態は自己の所有のうちに取り入れて，これを取りこむ行為を表わす場合。
4) 能動態では一般の実務的業務に主語がその職務上または，権限上関わりをもつことを表わすのに対して，Medium はその動詞の表わす行為に主意的に興味とか関心をよせることを表わす。
5) 最初 Gustav Krieger によって提唱されて以来その名称の当否は別として，今日用いられている dynamisches Medium（動的中間態）というのを挙げている，これは「動き」，これには精神的，心理的，身体的なものを含めての動きを表わす動詞の場合，その行為の実行者であるものが，他者との関わりを一切顧慮することなく，行為者自体の行為として表わす場合のことを言う，これを現代語で言うならば zu sich hin（自分自身に向けて）に当る行為の表現である。

ここに挙げた Wackernagel の中間態の五つの意味機能のなかで，ここで問題なのは最後に挙げられたものに当るかと思う，さらに Wackernagel はここにいう dynamiscles Medium について次のように説明している。

ギリシャ語の場合を例にとり，古来印欧語の動詞のなかには，唯ひとえに中間態の活用においてのみ現われるものがある，そのうち極く一般的なものとして *κεῖμαι* と *ἧμαι* の二つの動詞を挙げている。

griechisch *κεῖμαι* (ich liege) *ἔρχομαι* (ich gehe)
ἧμαι (ich sitze)

それらが中間態動詞であって，その意味するところは "*ich liege*" 及び "*ich sitze*" であって，形態的には Medium ではあるけれども意味機能の点では Aktivum と異なるところがない，このような動詞を Medium tantum（ずばり中間態動詞）といい，これはラテン語の Deponentia（所相形動詞）とも相通ずる面がある。

lateinisch. (Deponentia)
vehor (ich fahre) veho (ich führe etwas mit mir)
feror (ich eile)
morior (ich sterbe)
proficiscor (ich reise ab)

このようにみてくると，問題にしている古代ゲルマンの動詞とも一脈相通ずるところがあるように思われる。*sitzen, liegen* という動詞の表わす行為は他者への配慮なく，自己中心的になされることの多い動作である。また Wackernagel はさらに説き及んで，Mendium tantum を表わす動詞の多くが言語の変わりゆくなかで減退し，能動態と受動態の文法構造のなかに組み換えられていったと説明している。この点からすると，先程の再帰代名詞との共起現象との距離はさほどに大きくはないように思う。すなわちこうした，古代ゲルマン語の現象も過去における -ja-幹動詞のなかに時に中間的な古い機能の痕跡をほのかに垣間みせてくれているのかもしれない[3]。因みにゲルマン語のなかにも，それに類似した現象をわ

れわれに示してくれるような事実のあることを知っている。例えば古代アイスランド語の再帰動詞と呼ばれる一連の現象がある。それは動詞語幹と再帰代名詞とが融合した形から生まれたもので動詞語幹に三人称の再帰代名詞 sik とが縮約して出来たものである。それには他動詞のみならず自動詞とも融合して，例えば *koma* (kommen) から *komask*, *ganga* (gehen) から *gangask* といった再帰動詞形 (Reflexiva) が生成されるが，これと先のギリシャ語の中間態動詞とラテン語の Deponentia とは同工異曲の感がある。

また先に問題の Formans -ja- は現在形，不定形に姿を現わすけれども，その他の時形にはその跡を止めていないことを指摘したが，このことは，これらの Medium tantum 的な動詞が主意的 (voluntativ) で周囲に対しての慮りを欠く行動を表わすものであることを考えるならば，こうした行為は動作の進行する現在時制においてその本来の特性を発揮することができるのであって，過去時制などの場合には主観の立場を離れた純粋に客観的事実としての表現になる可能性が高く，従って Medium 的な表現は生まれにくい。

Brugmann (1904, 527), Wilmanns (1922, 32), Hirt (1934, 166), Meillet (1984, 111). Krahe (1969, 100), Scemerényi (1980, 254) などの言語学者はこの -ja- については一様に動詞現在形形成素とする見解に止まり，それ以上の説明を加えてはいない。

ではなぜこの数限られた動詞にのみ保存される結果になったのかということに関して言うならば，まずそれらが短音節の語であるということが理由として挙げられよう。上に挙げた以外にも -ja- 語幹をもつ強変化動詞としては *swerjan* (schwören 宣誓する) があり，ここにも再帰代名詞との共起現象が認められる。

swerjan (schwören)
Beowulf. 2736

ic on earde bâd
mæl-gesceafta, hêold mîn tela,
ne sôhte searo-niðsa, nê mô swôr fela
âða on unriht.

(私はこの大地に運命によって私に授けられた時の流れを生きながらえた。
自分に与えられたものを立派に保ち，卑怯な戦を求めることもせず，多くの誓いを不法，不正にしたこともなかった)

次にこれらの一連の動詞に共通する意味上の特性について考えてみるに，一つには主として自動詞，それも「発着，往来」などの運動を意味するもの，もしくは「驚怖，不安」といったような個人的で主意的な情動を表わす動詞などに比較的限られている，このことも前に述べた Medium tantum のもつ特性と内容的にも意味的にも符合するところがある。

さてところでこのような中間態的な要素が言語の表現面，特に語形の上から消え去りつつあったとき，伝統的に言語使用者の脳裡に刻み込まれてきており息の絶えることなく命脈を保ってきた自己中心的な行動や，個人の心理の裡に息吹く Gemütsbewegung (心の動き) を表わすべく，古代人の豊かな情趣と逞しい想像力がこのような Dativ と再帰代名詞との共起という periphrastisch な表現形式をとる方向へ向かわせたものと思う，なお資料に戴せた例文のなかから，この表現形式のもっている微細な表現価値の織りなす襞を感じとることができるかと思う。

最後に Heliand の3912行目以下の例文と，同じく Heliand の4929行目以下の例文とを比較してみるに，前の3912行目以下の方では再帰代名詞との共起現象が認められるのに対して，4929目以下行の方では再帰代名詞の随伴はみられない，この両者の表現のちがいを推し測ってみるに，後者つまり4929行の方では行動，ここでは歩行に対する主体としての行為者の意志的な動きが稀薄であるというよりは，むしろ他者からの強制によるものであって，この場合行為の主体はまわりの観衆の方にあるが，これに対して前者3912行の方では同じ *gangan* (gehen) という行為の主体は行為者自身の自発性にあることははっきりしている。このようなところにこそ Medium tantum，それも dynamiches Medium の本領が発現される恰好の場をみてとることができる。

zum Vergleich

Hei. 3912 f.

sô hwe sô thar mid thurstu bithwungan wâri,
sô ganga imu herrod drincan te mi
(もしのどの渇きに苦しむ者あらば，私のところへのどをうるおしに来られよ)

Hel. 4929 ff.

gang that barn godes
undar themu heriscepi handun gebunden,
drubondi te dale.
(神の子は手を縛られて，居並び，取り囲む人々の群の中を沈痛な面持ちで谷間へ下りて行かれた)

なおこうした Medium 的な表現はゲルマン語の歴史のなかで急速に再帰代名詞の Dativ 形を伴う periphrastisch というか analytisch な Umschreibung による表現形式へと加速していき，中高ドイツ語ではこの Dativ の用法は新高ドイツ語に比べると大幅に認められるのである。

Mhd.

Anno. 36, 1

sô diz liut nahtis ward slâfin al,
sô stûnt imi ûf der vili guote man
(人々がすべて夜の眠りについたとき，そのすぐれて敬虔な人は起き上った)

MS. 1, 38, 6, b

ich stuont mir nehtin spâte an einer zinnen
(私は夜おそく尖塔の夜警の屯所に立った)

Büchlein. 1. 1605

du bist sô harte niht verwenet,
du enmöhtest dir wol sanfte leben
(お前は落着いた人生が送られないほどに堕落してはない)

Walther. 14, 38

allêrst lebe ich mir werde
(今漸く私は有益な生涯を送ることができるであろう)

Iwein. 516

er sprach 'niene vürhte dir:'
(彼は「汝恐れるな」と語った)

Wigalois. 6448

si vorht ir sere:
(彼女はひどくこわがった)

がしかし中高ドイツ語でも時とともに次第にこの Dativ に代って Akkusativ が多く用いられるようになっていく，しかしいまだに現在でも Dativ と Akkusativ の間に揺れのあることを知っている。

英語でははやくに格の表示は失われかけていた。例えば

Caedmon. 666. f.

ic mæg heonon ge seon
hwær he sylf siteð.
(私は彼がどこに座ろうとしているかをここからみることができる)

というふうに，再帰代名詞の Dativ 形ではなくて，独立した再帰代名詞の無格形が使われている。ここにも英語の格の表示に対する感覚の稀薄化をうかがうことができる。

(注)

1) 印欧祖語の推定形として *-ey-/-yo- が措定されている。

2) cf. O. Szemerényi (1980. 234) および H. Hirt: Indogermanische Grammatik VI. — Syntax I. — Syntaktische Verwendung der Kasus und der Verbalformen. 1934. Heidelberg. S. 203 f.

なお Emile Benveniste も Aktivum と Medium の対立について次のように説明している。

"Dans l'actif, les verbes dénotent un procès qui s' accompli à partir du sujet et hors de lui. Dans le moyen, qui est la diathèse à définir par opposition, le verbe indique un procès, dont le sujet est le siège; le sujet est intèrieur au procès." (Problémes de linguistique générale. 1966. Paris. S. 174.)

(能動態では，動詞は主語より出て，主語の外で行なわれる事行を表示する。それとの対立によって定義づけられるところ態である中間態では動詞はその表わす行為のなされる中心的本拠であり，主語はその事行の渦中に没入している)

3) 印欧語の Medium がその史的展開の過程で後退し，それに代って再帰的な表現形式が個別言語の段階に入って急速な進展をみせることについては，

Brugmann, K./B. Delbrück.: Grundriß der vergleichenden Grammatik. III. 3. S. 708.

ABBREVIATIONS

alts ……altsächsisch
Anno ……Das mære von sente Annen
Caedmon ……Die Caedmonische Genesis
got. ……gotisch
Hel ……Heliand

Tat ·····Tatian

EDITIONS QUOTED

Beow. *Heyne-Schücking's Beowulf. I.* (ed.) E. v. Schaubert. 1963. München-Paderborn-Wien: Verlag Ferdinad Schöningh.

Caedmon. *Die ältere Genesis mit Einleitung, Anmerkungen, Glossar und der lateinischen Quelle.* (ed.) F. Holthausen. 1914. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung

AElfric's Treaties on the Old and New Testament and Preface to Genesis. (ed.) S. T. Crawfood. 1922. Oxford: Oxford University.

Edda. *Edda—die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern.* (ed.) H. Kuhn. 1962. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.

Hel. *Heliand und Genesis.* (ed.) O. Behaghal. Tübingen: Max Niemeyer. ATB. No. 4.

Wulfila. *Wulfila's Gotische Bibel.* (ed.) W. Streitberg. 1950. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.

WORKS QUOTED

Braasch, T. *Vollständiges Wörterbuch zur sog. Caedmonischen Genesis.* 1933. Heidelberg: Carl Winters Winters Universitätsbuchhandlung.

Braune, W./H. Eggers. *Althochdeutsches Grammatik.* 1987. Tübingen: Max Niemeyer.

Brugmann K. *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen.* 1904 Straßburg: Verlag von Karl J. Trübner.

Brugmann, K./B. Delbrück. *Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen.* II. 3. 1. 1916. Straßburg: Verlag von Karl J. Trübner.

Brunner, K. *Altenglische Grammatik.* 1965. Tübingen: Max Niemeyer.

Gering, H. *Vollständiges Wörterbuch zu den Liedern der Edda.* 1971. Hildesheim-New York: Georg Olms Verlag.

Heusler, A. *Altisländisches Elementarbuch.* 1967. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.

Heyne-Schücking. *Beowulf. III. Glossar.* (ed.) E. v. Schaubert. 1961. München: Schöningh.

Hirt, H. *Handbuch des Urgermanischen. III.* 1982, Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung.

Holthausen, F. *Alsächsisches Elementarbuch.* 1899. Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung.

Krahe, H. *Germanische-Sprachwissenschaft. II.* 1969. Berlin: Walter de Gruyter. (Sammlung Göschen)

Grundüzge der vergleichenden Syntax der indogermanischen Sprachen. Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft. Vol. 8.

Krause, W. *Handbuch des Gotischen.* 1968. München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung.

Meillet, A. *Les dialectes indoeuropéens.* 1984. Paris: Libraire Honoré Champion.

Sehrt, D. Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis. 1933. Göttingen: Vandenhöck and Ruprecht.

Streitberg, W. *Gotische Syntax.* 1981. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.

Szemerényi, O. *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft.* 1980. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Wackernagel, J. *Vorlesungen über Syntax. I.* 1950. Basel: Verlag Birkhäuser.

Wessén, E. *Schwedische Sprachgeschichte. I. II. III.* 1970. Berlin: Walter de Gruyter.

Wilmanns, W. *Deutsche Grammatik. II.* 1922. Berlin and Leipzig: Walter de Gruyter.

DICTIONARIES QUOTED

Altenglisches etymologisches Wörterbuch. F. Holthausen. 1974. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.

Althochdeutsches Wörterbuch. R. Schützeichel. 1969. Tübingen: Max Niemeyer.

Altnordisches etymologisches Wörterbuch. Jan de Vries. 1962. Leiden: E. J. Brill

An Anglo-Saxon Dictionary based on the manuscript collections of the late Joseph Bosworth. (de. and enl.) T. N. Toller. 1898. (repr.) 1980. Oxford

Gotisches etymologisches Wörterbuch. F. Holthausen. 1934. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.

Wörterbuch zur altnordischen Prosaliteratur. Walter Baetke. 1965. Berlin: Akademie-Verlag.

Middle Voice in the Old Germanic Languages and its Development

a form of the Old Germanic strong verbs with the formative *-ja-*

—— in the case of the strong verbs with the formative -ja- ——

Takeshi TESHIMA

In the Old Germanic languges there are a number of strong verbs which do not belong to those of the normal type. It is a well known fact that the Old Germanic verbal system consists of the two main groups, that is, the strong and the weak verbal constructions. In principle, the former group is characterized by the vowel gradation (Ablaut) of the verbal stem, whereas most of the latter group are derivatives from the other word classes by means of different derivative suffixes. However in practice there are some exceptions to this rule. Some Old Germanic strong verbs have at once the vowel gradation typical of the strong verbs and the stem-formative element which is characteristic of the weak verbs as well. Some examples of these verbs are **sitjan* (sit), **ligjan* (lie) and bidjan (bid), and apparently they all have the stem-formative element -ja- in common, which belongs generally to one of the weak verb derivative suffixes. The purpose of the persent paper is to throw a light upon the original semantic function of this formative and the reason why the formative -ja- has been unextinguished only in these few verbs. Wackernagel explains that the Indoeuropean language had originally the two voices, active and middle, and that in classic Greek the use of the Indoeuropean middle voice was well preserved. Generally speaking, the middle voice exprsses the movement and action which starts from the sentence-subject and goes back again to itself. But this very wide conceptionally orientated explanation does not suffice for the explanation of the particular detailed distinction of the use and function of the middle voice. That is why Wackernagel devides the principal use of the middle voice into five semantic functions. According to his explanation, one of these functions consists in the expression of the special condition that the subject acts only for itself, not for the other. These Old Germanic strong verbs with the formative -ja- are traceable to the means to express the Indoeuropean middle voice. For example compare the Germanic verbs **sitjan* and **ligjan* with Greek medium tantum ἧμαι (I sit) and κεῖμαι (I lie).

The functions of the middle voice correspond mainly to those of the dative reflexive pronoun. That is the reason why the above-mentioned exceptional Old Germanic strong verbs with the formative -ja- are often accompanied by a dative reflexive form. This rule can also be applied to some other strong

verbs with the formative and to some very common intransitive verbs expressing departure or arrival.

In the course of the further historical development the role which was formerly performed by the middle voice has been transmitted to the assignment of the dative reflexive form so much the more, as the middle voice has disappeared gradually from the morphological and functional levels.

（本論文は1989年の日本独文学会秋季研究発表会（大阪大学）において口頭発表したものを修正加筆したものである。）